原子力リスク研究センター（NRRC）第１回　原子力経営責任者会議　議事概要

１．日　時：2014 年 10 月 3 日（金）10：00～12：30
２．場　所：電力中央研究所（大手町本部）役員大会議室
３．出席者：（順不同、敬称略）
　主査：G. アポストラキス（NRRC）
　委員：槙（北海道電力、酒井代理）、井上（東北電力）、姉川（東京電力）、阪口（中部電力）、米原（北陸電力、金井代理）、豊松（関西電力）、古林（中国電力）、柿木（四国電力）、荘野（九州電力）、市村（日本原電）、田中（日本原燃）、永島（電源開発）、横山・尾本（NRRC）
　幹事：横尾・示野（NRRC）

４．議事概要

幹事より、10 月 1 日に行われた NRRC 発足記者会見の結果、及び、アポストラキス所長と小渕経済産業大臣との会談結果が報告された。また、NRRC の来年度以降の研究計画の検討状況について報告された。

アポストラキス所長より就任に際しての抱負が述べられた後、委員との間で意見交換がなされた。

【アポストラキス所長の抱負（要点）】

当センターのミッションは、事業者の皆様方が継続的に安全性を向上させ、発電所の残余のリスクを管理する支援をすることだと考えている。当センターの発足にあたり、ミッションとビジョンを明文化してウェブサイトに掲載した。

事業者の支援をしていく上では、皆様の取組みの状況を理解するとともに、当センターに何を期待しておられるか、皆様の意見を聞いて、当センターは何ができるかということについて考えたい。

ミッションステートメントにおいては確率論的リスク評価、リスクマネジメントだけでなく、リスクコミュニケーションについても述べている。特に今の日本ではリスクコミュニケーションは極めて重要であると考えており、単に技術的な関係者だけでなく、一般の国民に対するコミュニケーションも非常に重要であると考えている。

私たちのビジョンは、センターオブエクセレンス（中核拠点）として世界から尊敬されるセンターになることである。優れた研究開発拠点になるためにはどうすべきなのか、いかに国民とコミュニケーションしていくかが課題になる。まず重要なのは優れた研究を行うことであり、加えて、オープンかつ透明性を確保することが大切と考えている。

重要なことは事業者の皆様と常にオープンなコミュニケーションラインを確保することだと思っている。リスクマネジメントとは、Risk informed decision making（リスク情報を活用した意思決定）であると互いに理解し合いたいと思う。ここで言う Risk

informed decision making とは、その意思決定を行うインプットとしてリスクの評価が入ったものになるが、意思決定をされる方は多重防護やコストなど色々なことを考慮に入れなくてはならず、リスクだけが大きな意思決定の要素になるわけではないということである。

今後２年から２年半の間で、まず地震と津波という二つの外部事象を重点的に取り上げたい。それと同時にリスク評価に必要な基盤整備も進めていきたい。基盤整備の分野においては人間信頼性評価(HRA)に取り組みたい。

【主な意見交換】

（委員）我々の自主的安全性向上のロードマップや、リスクマネジメントが強化されていることが社会に見えていかないと、日本の原子力は復活しないという思いで取り組んでいる。

（委員）我々が取り組むことについて一般の方からのご理解をどうやって得るかという点で、是非、米国でどのようにされてきたのか知りたい。

（所長）パブリックは一つではなく、様々なグループがいる。まず相手の意見に耳を傾けて、意見を聞いたうえで自分たちの考え方を決めることである。最も重要なことは、我々事業者が何も隠さずに率直に話をしていると納得してもらうことである。そしてもう一つ重要なことは、パブリックにレクチャーしてはいけない。両方向のコミュニケーションでなくてはならない。

（委員）PRA において人間信頼性評価は非常に重要であり、それ高度化して頂くことを NRRC に期待している。

（所長）人間信頼性評価については、世界的にも、福島第一の事故のような過酷な状況での人間のパフォーマンスや、住民避難の問題は今まであまり研究対象になっていない。

人間信頼性評価の分野に限らず、リスク評価はリアリスティック（現実的）なものでなくてはならない。私たちの研究を現場で役立つものにするうえで、エンジニアリングやメンテナンス、オペレーションに携わっている現場の方々にご協力をお願いしたい。現実的な評価ができればトップの方の意思決定にも役立てることができる。

（委員）どのようにリスクコミュニケーションをしていくのが良いかについても聞かせて頂ければと思う。

（所長）リスクコミュニケーションに関連して、安全かそうでないか、どちらかの答えを求めようとする人に、残余のリスクについて理解してもらうことが重要になる。

原子力の仕事に限らず、日々のあらゆる仕事は、何らかのリスクを伴うものである。それでもやっているのは、便益があるからである。一般の人と話す時には、できるだけそういう話から始めるようにしたい。

以上